

## マルコによる福音書 3章 7節～19節

2014年12月25日

古本 靖久

1、聖歌 517番 「主が来られたから」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 65 ページ）

4、テキストの位置

前回の内容をおさらいしてみましよう。イエス様が安息日におこなったことにより、ファリサイ派の人々はヘロデ派の人々と一緒に、イエス様を殺害する相談を始めます。つまり、イエス様は受難への道を歩み出したということがいえます。

ガリラヤ宣教①	1:21-3:6	治癒と論争物語
要約的報告	3:7-12	集まってくる群衆
ガリラヤ宣教②	3:13-19	呼び寄せられた 12 人
	3:20-30	ベルゼブル論争
	3:31-35	イエスの母、兄弟
	4:1-	たとえで語る

そして今回から、新たな段落へと移行していきます。前半部では今までの要約ともいえる報告がなされ、後半では 12 弟子が選ばれます。マルコ福音書にとって、弟子はどのように描かれているのか、見ていきたいと思えます。

5、節ごとに

### ◆集まってくる群衆

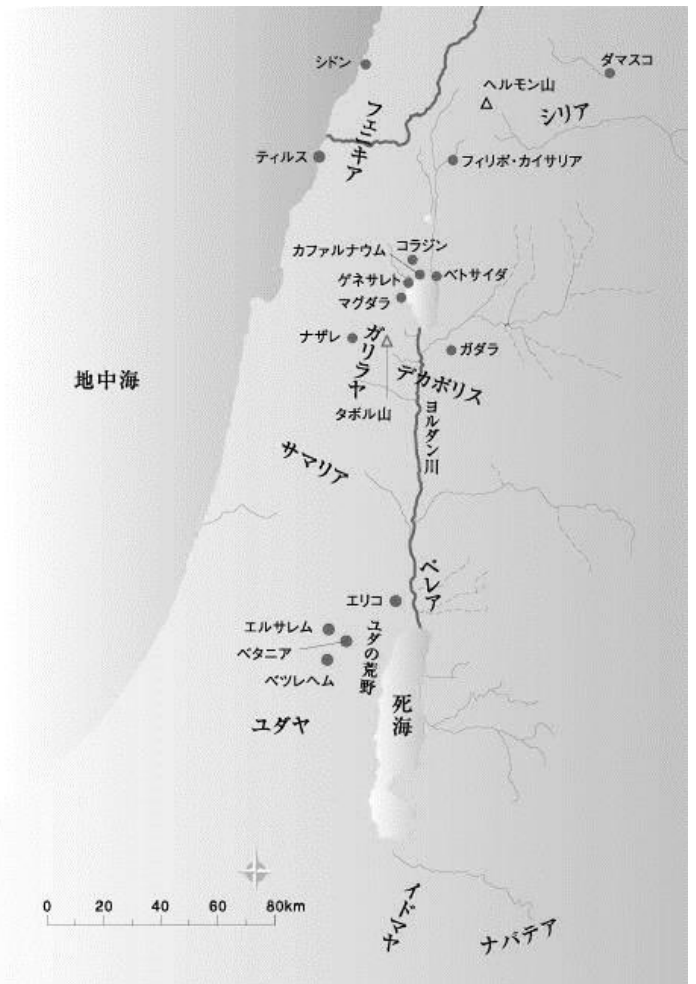
**3:7-8** （そして）イエスは弟子たちと共に湖（海辺）の方へ立ち去られた（退いた）。ガリラヤから来たおびただしい群衆が従った。また、ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドンの辺りからもおびただしい群衆が、イエスのしておられることを残らず聞いて、そばに（彼ののもとに）集まって来た。

イエス様はまた湖と移動されます。マルコにとって湖は、イエス様が宣教する場であり、弟子たちを召される所でした。

ここで注意して見ておきたいのは、「従う」という言葉です。ガリラヤの人々に対しては、マルコは「従う」という動詞を用いています。しかし、その他の地方の人々は単に「やって来た」。このことは、マルコがガリラヤをいかに重要視しているかを物語ります。

しかし一方で、マルコ福音書にはサマリアについての言及が一切ありません。この7節と8節に出てくる地方を丸で囲むと、その中央に位置するサマリアについて何も語らないのは、非常に不思議です。当時の一般的なユダヤ人が持っていたサマリアに対する忌避感情をマルコも持っていたのかもしれませんが。

さて、後半に出てくるイドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルス、シドンは異邦人の地です。なおイドマヤは旧約聖書の中では一般に「エドム」と表記されています。洗礼者ヨハネのもとには、ユダヤの全地方とエルサレムの住民が皆、集まってきたと書かれていました。しかしイエス様のもとには、異邦人を含む諸民族が集まっています。その働きが異邦人にまで及んでいったのです。



イエスが宣教した町々

3:9 そこで、イエス（彼）は弟子たちに小舟を用意してほしい（おくように）と言われた。群衆に（が）押しつぶされな~~い~~ためである（せまるので）。

新共同訳のように「押しつぶされる」という表現を使うと、イエス様が身の危険を感じて小舟に乗ろうとされたように感じます。しかし、この小舟は4章で、「乗って腰を下ろし、教えられ」るために用いられています。

イエス様は少し離れたところから語るために、小舟を用意しておくようにとあらかじめ弟子たちに命じておかれたのです。

3:10 イエス（彼）が多くの病人（人々）をいやされたので、病気に悩む（苦しむ）人たちが皆、イエス（彼）に触れようとして、そばに押し寄せたからであった。

ここで用いられている「病氣」の原意は「鞭」です。つまりここでの病氣は、体の中に鞭を抱えているようなものです。体を動かすたびに、鞭で打たれたような感覚を覚える、この表現は、実際にそのような症状に苦しむ人でないと分からないかもしれません。それらの人々がイエス様のもとへ、殺到するのです。

**3:11** 汚れた霊どもは、イエス（彼）を見ると（彼の前に）ひれ伏して、「あなたは神の子だ」と叫んだ（で言った）。

前節までの人々や、用意した小舟がどうなったのか、ここには書かれていません。いやしの記事があるわけではなく、唐突に汚れた霊が出てきます。病気に苦しむ人たちの中にいたのか、それとも別なのか。この段落は「要約記事」として書かれているので、具体的な行為に触れられていないようです。



汚れた霊は悪霊と同義です。彼らはイエス様が「神の子」であることを知っていました。天上の勢力である汚れた霊がイエス様の本質を知っているということは、神さまの支配が地上に介入し始めたことを意味するのかもしれませんが。

汚れた霊たちは、イエス様の前にひれ伏します。彼らはイエス様の中に働く神さまの力にひれ伏したのです。

**3:12** （そして）イエス（彼）は、自分のことを言いふらさない（明らかにしない）ようにと霊ども（彼ら）を厳しく戒められた（叱りつけた）。

イエス様は、ご自分が何者であるのかを明かさないようにと命じます。汚れた霊たちに対して、厳しく叱りつけるのです。新共同訳で「戒める」と訳されている語は、一般に「罪を課する」という意味で用いられ、マルコでは相手を厳しく叱りつけることを指します。

なぜイエス様はご自分のことを言わないように、命じたのでしょうか。汚れた霊たちが言いふらしてもらった方が、宣教活動はスムーズにいったのではないのでしょうか。

マルコの読者は、イエス様のことを「神の子」とであると認識していました。しかしマルコにとって、その理解は「イエス様の十字架」を通してしか、正しく与えられないものでした。

わたしたちにとっても、イエス様の十字架の出来事を自分の中に受け入れて初めて、イエス様を神の子、救い主として告白することができるのかもしれませんが。

## ◆呼び寄せられた 12 人

**3:13** (そして) イエスが (彼は) 山に登って、これと思う (ご自分が望む) 人々を呼び寄せられると、彼らはそばに (彼のみに) 集まって来た。

マルコは新しい単元の初めに、12 人がイエス様によって選ばれた記事を書きます。このことは、マルコにとって弟子というテーマが重要であったことを示します。この 12 人のリストはマタイ 10:2-4、ルカ 6:14-16、使徒 1:13 にも登場しますが、タダイという人物はルカおよび使徒言行録には出てきません。またヨハネ福音書には、独自の名前も出てきます。

イエス様は山に登られます。山は祈りの場所 (6:46) であり、神さまの啓示の場所 (9:2、9) でもあります。どこか特定の場所というよりも、「山」という言葉自体に大きな意味があるのです。

また、イエス様はご自分が望む人々を呼び寄せます。イエス様が一方的にお選びになったということが、ここでは強調されます。

**3:14-15** そこで、十二人を任命し (定め)、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため (と共に) おらせ、また、派遣して宣教させ (るために派遣し)、悪霊を追い出す権能 (権威) を持たせるためであった。

新共同訳にある「使徒と名付けられた」という言葉は、以前使っておりました口語訳聖書にはありませんでした。この語が入っている写本と入っていない写本が存在するためです。口語訳が出来た時のギリシア語聖書では、この言葉は入っていないと考えられていましたが、新共同訳が底本とする版では【 】付きで採用されました。そのため、新共同訳では「使徒と名付けられた」を入れているようです。

しかし多くの聖書学者は、この言葉は後代の付加だろうと考えます。教會的な權威を守るためにつけたのか、ルカ福音書に使徒という言葉が出て来たのでそれにならったのか。けれどもイエス様は、12 人を特別な職に任命したというわけではなかったようです。

12 という数は、旧約聖書にも出てきます。ヤコブの息子の数であり、イスラエルの部族の数です。この数はイエス様が新しいイスラエルを形成しようとしたことを暗示します。またこの伝承を伝える人たちにとっても重要なことは、個々の名前ではなく 12 という数だったのです。

イエス様は彼らを自分のそばにおくために定めます。つまり弟子になることとは第一にイエス様と共にいることなのです。

**3:16-17** こうして（そして）十二人を任命された（定めた）。シモンにはペトロという名を付けられた。ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲス、すなわち、「雷の子ら」という名を付けられた。

ここから 12 弟子の名前が列挙されていきます。全員言えますか？日曜学校の歌には 12 弟子の名前が全部出てくるものがあります。何度も歌うと、覚えることができるかもしれません。

それぞれの人物について言及するのはここでは控えます。詳しく知りたい方は、聖書の他の箇所を見ていただくか、ヤコブス・デ・ウォラギネがまとめた『黄金伝説』、バークレーの『イエスの弟子たち』、『遠藤周作で読むイエスと十二人の弟子』などを読んでも面白いと思います。（記述の中には、いわゆる「伝説」も多く混ざっているので注意が必要です）



**3:18-19** （そして）アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、それに、イスカリオテのユダ（を）。このユダがイエスを裏切った（引き渡した）のである。

これらの名前は福音書によって違うものもあれば（タダイ→ルカ文書ではヤコブの子ユダ）、名前の前に付加があるものもあります（マタイ→マタイでは徴税人マタイ）。また登場する順番も違います。このことは、福音書が書かれる時代にすでに、様々な伝承が存在したことを示します。

おそらく 12 人全員がよく知られた人物ではなかったのでしょうか。つまり初代教会の中で、重要な役職をこれら 12 人が担ったわけではなかったのです。イエス様は 12 人を選びましたが、教会の指導者を選んだわけではなかったということです。

## <今回の箇所から>

イエス様はさらに活動を続けていきます。ファリサイ派たちがご自分を殺そうと相談していることは、耳に入っていたのでしょうか。それにもかかわらず、群衆は次々と押し寄せてきます。そこでイエス様は 12 人を選ぶのです。

イエス様を選んだ 12 人には、何か共通点があったのでしょうか。人一倍責任感が強く、また人々に尊敬されているような人物でしょうか。それともイエス様と意見が合い、同じ方向を向いていける人たちだったのでしょうか。

そうではありませんでした。イエス様は自ら弟子たちを選びました。しかしそのリストの最初には、イエス様のことを三度も知らないといったペトロが出てきます。さらに最後にはイエス様を十字架に引き渡したユダが書かれているのです。

弟子として選ばれた人たちは、決して完全な者ではありませんでした。同じようにわたしたちがイエス様から呼ばれたのは、完全な者だからなのではないのです。

また、イエス様が 12 人を選んだ第一の理由は、「自分のそばに置くため」でした。弟子たちにとって、イエス様のそばにすることが大切だったように、わたしたちにとって一番大事なことは、イエス様と共にいることです。つまりイエス様が歩いた道を同じように歩むことではないでしょうか。

祈りの中で、聖書のみ言葉から、そしてキリスト者同士の交わりから、わたしたちはキリストの名のもとに歩む力をいただけるのです。



今回の学びは、これで終わります。次回は 1 月 22 日(木)10 時 30 分からです。「ベルゼブル論争、イエスの母、兄弟 (マルコ 3 : 20~35)」について学んでいきます。